

浜嶋です。
こんにちは。

体温計は、36度4分を表示した。

「浜嶋さん、大丈夫ですよ。退院OKです。」と看護師さんが、にっこり笑って言った。
私は、すでに着替えて退院準備はできていた。

病棟受付でベッドの片づけ確認の終了を報告し、入院のお礼を言っているところに、別の看護師さんがやってきた。

「浜嶋さん、先生からの伝言です。次の6日はすごく混みます。採血を早くすませてくださいとのことですよ」

「こんな時間に連絡ですか？ 先生優しいね。ありがとう」

私は、病棟10階から1階に降りた。

採血受付は何時からやっているのかと思って、外来の2階に上がってみた。

受付機に受付時間は書いていなかった。

多分、玄関の本受付と一緒に8時からだろう。

採血受付を本受付の前に済ませると早いと言っていたおじさんがいたことを思い出した。

エレベーターを降りると、抗がん剤を投与する化学療養室がある。

「今年は今日で終わりだ。療養室の看護師長にはいつも励ましてもらったな。挨拶して帰ろう」と思った。

療養室にはまだ患者はいない。4人の看護師が打ち合わせしていた。

目指す看護師長は小柄でおかっぱ頭だからすぐわかった。

看護師長を見ながら言った。

「挨拶にきました」

全員が立ち上がり、こちらを見た。

「今日退院です」

「おめでとう」

「次の5回目は、6日にきます。またお世話になります」

「6日は本当に混むよ。早く採血してね。ここの治療も遅れるからね」

「はい。さっき、先生から伝言がありました」

いつも明るい看護師長は、病棟の方を指さしながら言った。

「うん、さっき先生に連絡しておいたから」

「看護師長さんからの伝言だったの」

病院のシステムは検査結果はどこからでも見ることができるし、退院日もわかるのだろう。

それにしても、看護師長は心配りができる人だ。

看護師長には2年半お世話になっている。3か月に1回ぐらいのペースで会うだけなのによく知ってるのだ。

「ここに寄ってよかったです。私に伝言してくれた主は看護師長だったことがわかったんだから」

私は、なんとも言いようのないうれしさを感じた。

看護師長とは、心のふれあいがまた深くなった気がした。